

思ひ出を語る

旧豊平橋のたもとで生まれ育った関正明さん。幼少の頃からの、橋にまつわる思い出を語ってもらいました。

川は子どもの遊び場

橋のすぐそばで生まれ育ったので、ものごとろついたりきには、グリーンに塗られた三連アーチが伸びる風景は、当たり前のものになっていました。

今のように、おもちゃやゲームがある時代ではなかった。子どもたちは皆、川に集まって遊んでいました。夏は泳ぎや魚釣り、冬は堤防を使ってのスキーなど、年中、

暗くなるまで遊んだものです。

泳ぎは豊平川で覚えまし

た。上級生に川へ投げられて、溺れそうになりながら必死になって

泳ぎました。当時の豊平川は橋の下が深かったので、泳ぎが上達するとアーチによじのぼって飛び込んだりもしました。大人たちには叱られました。子どもには格好の遊び場です。今の時代では考えられないことですね。

中央区側の河川敷では盆踊り大会も開催されていました。大勢の人が集まってにぎやかに楽しんでいましたよ。

春の馬糞風

小学生のころ、橋や店の前の道を走る交通機関といえば、電車と馬車。特に馬車は生活に密着した乗り物でした。一般の方の車が、たくさん走り出したのは、終戦後、少し経ってからはないでしょう。

馬車を引く馬は生き物なの



橋を渡る馬車。豊平地区は馬具の街としても有名でした。(昭和35(1960)年/札幌市写真ライブラリー所蔵)

で、当然のように落とし物をしています。春になると、冬の間の落とし物が融け出して、馬糞風のおいげがきつかったことを思い出しますね。都心部に出かけるときは、電車に乗ることもありました。豊平地区からススキノに働かに行く人も多かったので、夕方5時頃には、大勢の人が電車待ちの行列を作っているのをよく見かけました。

れるために、父親と一緒にリヤカーを引いて渡ることも多かったです。その頃は店の景気もよく、あまりに大量の商品を積んで帰るので、橋の付近にあった交番で呼び止められたこともありました。

橋を見ない生活

現在の札幌パークホテルの場所に建っていた東高校に進学しましたので、毎日、橋を渡って通学していました。残念ながら、橋でデートなんて思い出はありませんけれど。

架け替えの話聞いた時は、交通渋滞もひどかったので、仕方がないという気持ちと、なんとか残せないものかなという気持ちが入り混じり、複雑な感じでした。店の前で毎日眺めたあの風景は、我々札幌に住む人間の誇りでもありました。

自分にとって豊平橋と云えば、旧豊平橋です。本当にいい橋でしたね。思い出は尽きません。

架け替え



旧豊平橋の完成により、初めて豊平川を電車が渡りました。(昭和28(1953)年/札幌市写真ライブラリー所蔵)

関正明さん

昭和11年生 69歳

豊平地区で、創業77年の「せき呉服店」を同地区町内会連合会会長を務める。

